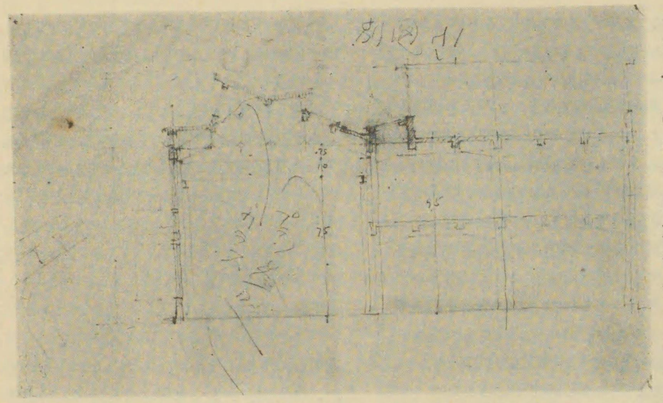
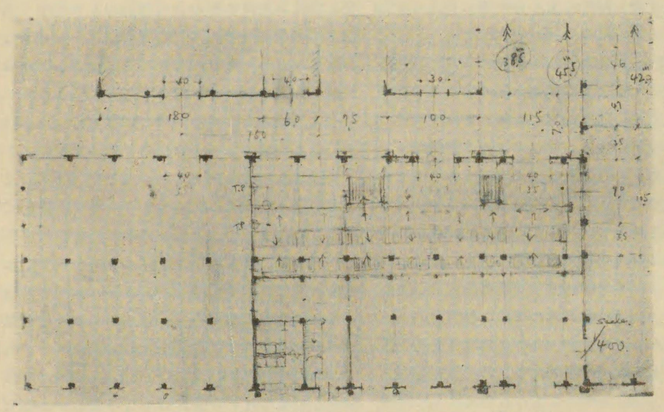


東京計器增築工事のスケッチ　(其の一)
斷面圖——文字は前田病院の病床にて書かれたもの——絶筆



東京計器增築工事のスケッチ　(其の二)
平面圖

と言ひのこされたと云ふ。

高松さんは前の言葉にも現はれてゐる樣に、建築に就て强い自信と堅い信念とを持つておいででであつた。これは作品を通覽するとき誰でもが感ずることである。何時だつたかこのことを丸ビルの三共か何處かでコーヒを飲み乍ら申上げたらイヤーあれしか出來ないんでと謙遜されておいででであつた。この自信と信念の强い生活の反面には弱い一面もあつて、自分

つて下さい！　奥樣が事務所の齋藤さんですよと仰つしやられるや最早眼は動かぬ乍ら、たちまち意識を回復され、いつもの調子で早口に東京計器の仕事に就て依頼者の要求のこと、御自身の意見のことなどこまごまとしかもシツカリ等と話をされてをらるる間でも時々目頭をにじませられることもあつた。

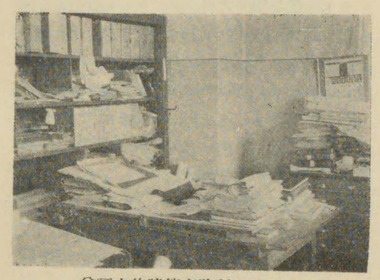
高松さんは萬事親切であつた。自分等が何かにつけて御相談申上げると、斯うした方が親切だと仰つしやつたものだ。餘りにも親切であつ



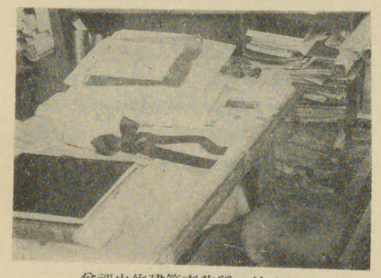


たがためにある一部からは誤解され忌避されたこともあつた樣であるが、その人達が他の人に依頼してはじめて高松さんの眞價を知つて後悔すると云つた具合で、高松さんに設計を依頼され建築を完成された方々は全く幸福な方々である。

高松さんは何時も冷靜であり、我々若いものにはよき助言者であり、よき清凉劑であつた。自分の知つてゐる限りに於て、決してお怒になつたことなどなかつた、唯一度、ある仕事のために本氣で御議論なさつていらしたのを見受たことがある、何んでも六、七年以前のことで事情は入所間もないことであつたから、自分にはよく分らなかつたが、それつ切りである。



曾禰中條建築事務所に於ける
高松さんの席　(其の一)



曾禰中條建築事務所に於ける
高松さんの席　(其の二)

高松さんに就てもつと書くことがある筈であるが高松さんの死を信じ得ないもゝこの事實に對しての當惑から、呆然何事も筆にのらない。

人生五十年とは云ひ乍ら餘りにも短い生命ではあつた。几帳面な高松さんだから、人生は五十年とハッキリされたとも笑つてもゐられない。高松さんの活動はこれからとひそかに期待し、自分も高松さんの將來を恃みとするものの一人であつたが、……昨年始めあたりから何んとなく元氣がなかつた樣にも見受けたが高等建築學の病院建築の著作に精根を盡されてゐるせいかとも思つてゐたのであつた。

高松さんの机上は、寫眞で御覽になる樣にいつも書類と圖面の山積である、高松さんの仕事の多樣性と多數を示すもので決して他のそれの樣に不精からではなかつた。

自分一人だけではなく所員の誰れもが高松さんの死をいまだにほんとうとは信じ得ないのである。だから、高松さんの机上は三月二日お歸りのまゝ、約一月を經て尾山さんがこの席に見える迄そのまゝであつた。

## 級友の追憶

### 波江悌夫

綠の松の大樹折れて
哀し傷し、雪降る朝
都、大路はいと寂し
何とて天は無情なる
吾等が兄とし敬へる
君遠く去つて今は在らず。

## 級友の追憶

### 大倉直介

光りのない生命はない、若しあるなら塵箱の中をあさる野良犬の存在と同じ事だ。

高松君は去參月拾壹日の朝、突如其光りに滿ちた短い一生を本當に此世から拯き消されて、日頃念じられた天の主のみもとに昇られて了つた。まるで夢のやうだ。

今でも毎朝、青山高樹町の通りを通る僕は、高松君のあの痩身長軀の然も骨太で、赤い短い髭の、口の脇に十字架の疵のあつた君が、煙草を薫らせ乍ら、石膏屋の横から出て來られる姿が、まざまざと眼に殘る。

然し例へ君の肉體は地上から消えても其崇高な足跡は、我精神界に、藝術界に、永遠に殘るであらう。

實に高松君は生き甲斐のあつた方で、生命の光りを、いやが上にも輝かされた方だ。

此點で我々は羨ましくもあり、又其永眠は長兄を失つたと同じ悲しみに我等は滿たされて居るのである。

あと半月ばかりで花の春となる。花に先だつて長逝された、君に溫室の花を捧げねばならなくなつたのだ。

生かす道は生きる道で、高松君は生きる本道を通つて彼の世に行かれた。

## 級友の追憶

### 置鹽章

高松君が病重しと云ふことを、三月十日大阪學士會倶樂部で、波江君から始めて聞いて驚いた。切に快癒を祈つて居た處、其翌日遂に長逝せられた通知に接して、茫然暫く言葉を出す事が出來なかつた。

從來にも倍して、之からも之からも益々其の圓熟した技能を建築界に發揮して行かうと云ふ時期に當つて、英才を抱いて忽然として逝いた。誠に悲哀の極である。

高松君とは友交二十八年建築界に於ける識見手腕は既に充分一般の知悉する處なるも、其友情に富み、人格の高潔なりし事は友人の皆追慕する處である。

高松君の長逝數日前手紙を送つて同君を煩はした件につき解決の謝意を表したのだが、恐らく同君は見なかつたのであらう。

高松君と最後に會つたのは、昨年十一月上京の節、土曜會の會合であつた。

今尙當時の溫顏が目前に彷彿として居る。數年の後には同君銀婚の祝賀をする筈であつたのに、誠に哀惜の至りである。

## 級友の追憶

### 木子七郎

こゝ十數年斯美會員は缺けたものがなく、どんどん外國に行つたり、子供が出來たり、又娘が嫁入りしたり、孫が出來たり、銀婚式が來たり、お目出度い事の限りで、かくも元氣な高松君が、ポツコリさきに逝かう等とは考へた事もないので、甚しく我々友人に大きなセンセーションを與へられた事です。

あの才人の高松兄！

努力家だつた丈けに、多少初老の大切にしなければならぬ自身を、やはり若いもので無理をした爲ぢやないかと氣の毒に思ふ。

本當の仕事はこれからだつたのに……

然し乍ら建築家として、幾多の業蹟を殘し且つ學士會、學會に大に貢獻して來たので、思ひ殘す事もあるまい。

只殘されたる子女の方々が御いたはしい。

眞面目な一生を淸く送つて、天國でも必ず樂園に召されて居る事と思ふ。

哀悼にたへない。

## 高松さんと私

### 佐藤四郎

鶯溪の伊香保で木葉會のあつた晩の歸途であつた、飲めもしない酒を相當飲んだので無暗と火照る醉顏を、どこからともなく木犀の香のほんのりと漂ふて來る初秋の夜風に快く吹かれながら、高松さんと、安井さんと三人で、星影の疎らな薄暗い上野の山を本郷の方へぬけたのが、私が大學へ入つてから高松さんを親しく知つた最初の機會であつた。

其の頃、私はいろいろな事情の爲に精神的にひどくなやんで居て、居たたまれないやうな焦燥と、呪ひにも等しい憂鬱とに其の日その日を送つて居た時であつたので、ずゐ分極端な、思ひきつて過激な人生觀を、酒の勢で四邊憚らず論じたのを、お二人とも笑ひながら靜に聞いて居られて、高松さんは時々あの物やわらかなしんみりとした調子で人の世の更に明るく美しき半面を見るべきことを敎へて下すつた。

高松さんと、安井さんとは西片町のから橋の側の素人家に下宿して居られた、其の下宿に落付いて、若い者にありがちな昂奮と感激とにお喋べりをして居る中に夜もいたく更けたので、私はそこに泊めて頂くことにして、二室の間の襖を開けたまま三人で床に就いたのだが、一と眠りしたかと思ふと私は急に苦しみ出した、酒に惡る醉をしたのであつた、お二人共起きて下すつた、そして右ひだりから感謝の言葉も無いまでに御親切な介抱をうけたのである、人の世の冷めたい暗い道ばかり歩いて來て、つい知らずしらずかたくなに心せまく育ち、疑惑と反感の瞳を以てのみあらゆる物を見ることに馴らされて來た私であつたが、此の時はじめて人の情のあたたかさをしみじみと感じたのであつた。

夜は明けた、お二人は學校にゆかれた、小母さんにかゆをたのんでおいたからそれを食べてゆつくり休んで居たまへ、學校の方はよいやうにしておくから……とお二人の出てゆかれる時のやさしい言葉であつた。

疲かれ切つた身體を床の上に横たへて、うとうととして居ると枕上の障子に日の光が一ぱいにあたつて小鳥の鳴く音が遠くから夢のやうに聞えて來る、私は昨夜からの出來事を嚙みしめて味はうやうにたん念に考へて見たそしてどうしてももう一度私の有つて居る人生觀に就いて高松さんと論議して見たいと思つた。

そんな事のあつてから間もなく私は病氣になつて麻布の病院に入院する事となつた、十幾日か全く夢中で死線を彷徨したあとで漸く回復期に入つた、冴えた月夜の街衢から枝豆賣の澄んだ聲が微かに傳つて來て、病室の窓の下にもこうろぎがなき出したほど秋も深くなつたのである。

首と手を少し動かす他には寢返りすることすらも許るされなかつたが、肉體にはたいした苦痛があるといふのでもなかつたので私はぢつと內省的思索に浸りつゞけた、其の結果どうしても高松さんの意見が聞きたく、每日斷片的な手紙を書いた處、數日にして待ちに待つた返事が來た、優さしい友情のこもつた長いながい返事であつた、其の返事には、君の謂ふ所は單に冷徹な理性で構成した哲學に過ぎない、それを以てうるはしき人の子の彼と是との交錯を率しやうとするのは無理だ、それには愛と云ふものを加味しなければならぬ、哲學に愛を加へたものが卽ち宗敎だ、宗敎こそは人生の最高最大なる指導者であるといつたやうな意味のことが細まごまと書いてあつた、果してそうであらうか、欺瞞と虛飾と殘虐と貪慾との醜い人生になんの宗敎であらうぞ、なんの愛であらうぞ、敬服して居る高松さんの言葉であるから勿論それは正しい人生の觀方であらうとは信じて居ながらも、汚れた暗い人生をのみ見なれて來た私にはどうしても無條件にそれを肯定することは出來なかつた。

學校を出て、複雜極りなき實社會と直面するやうになつてから私はますます私自身の冷めたい理性的な人生觀をかたく把つて矛盾と撞着との生活に輕蔑と憤懣とを叩きつけて齒をくひしばつた、高松さんの愛と云ふことは遠い空の美くしい星の光のやうなもので到底手の屆かぬ理想であるとしか思はれなかつた私は思ひ餘つて人生否定とすら叫けびたいやうな苦悶を抱きながら、或る年の夏も末の頃叡山の横川の華藏院の客となつた。

ぢつと耳をすますと何處かでかすかに筧の水の音がするばかり靜寂其のもののやうにしんとした僧堂の一隅に机を置いて私はむさぼるやうに法華經を讀んだ、四日目の朝、魔所と呼ばれ

た元三大師の廟に詣でての歸り途でふつと佛の慈悲と云ふことがおぼろ氣ながら解かつたやうな氣がした、そして其の時稻妻のやうに私の頭腦に閃めいたのは高松さんの愛であつた、これだなと思つた、水の底のやうにすみ切つた秋氣が早くも山の上に爽やかに流れて居た、なんとも名狀することの出來ぬ歡喜に胸がいつぱいになつて足音も輕く華藏院に歸つた私は、そのまま御本尊の前で瞑目端坐あらためて壽量品を繰り返へしくりかへし讀誦したのであつた。

此の時から私の人生觀は急角度に轉回した高松さんの愛と云はれた言葉をしみじみと考へるやうになつた、そうだ愛だ、人生は愛だ愛でなければならぬ、路傍の小草の花にも、躓いた小石にも愛を以て觀たい、まして自分の交つて居る人々、關係して居る事業などは云ふまでもない、電車に乘るにも、道を横切るにも愛を忘れずに居たならば、人の世はいかに明朗なるものとなることであらう、そう思つて見て居ると、なるほど高松さんはどんな小さな事にでもいつも愛を以て接して居られた。

私は精神的に高松さんに救はれたのだ。

それから大分歲月は流れた。

昨年の編輯會の或る日、この事を高松さんにお話しすると、そばを食べて居た箸を置いて思ひ出深かさうな顏に人なつこい微笑を浮かべながら僕もあの時分の信仰がなつかしいよと云はれた。

ほんに高松さんは信仰の人であつた、ちつとも宗教家くさくない信仰の人であつた、どんな場合にでも愛と云ふものを忘れた事のない人であつた、だがもうあの優さしい面影に接することが出來なくなつた、ぴつたりと人の魂に觸れるやうな同情のこもつた言葉をきくことが出來なくなつた、人生と云ふものは殘していくものの多い處だと云ふやうなことを物語りながら微笑みて最後の呼吸をひきとられたと聞いた、高松さんは死をすら愛を以て觀られたのであらう。

高松さんの精神的方面には終始一貫愛と云ふ美しい溫い流れが脈打つて居た事を思ふと私は教へ導かれることが非常に多いと感ずるのである。

## 級友の追憶

### 鈴木鎭雄

昭和九年三月十一日、突如として高松政雄君長逝す。ことの餘りに急なるに、ひたすら茫然自失、人生は無常なりとは云へ、斯く迄轉變の速かなるものかとの感を深うせざる事を得ない。平素至つて几帳面な君が丁度人生を五十で、見切を付けた所なんか如何にも君らしい感じもする。而して能率百パーセントの生涯を送られた。

君は常に私共クラスメートの中心であつた私共が今後君に俟つ處多かつたのに實に殘念で堪らない。

君としても幾多の心殘りがあつたらう。

私共が未だ學校を出て間もない頃の事だつた。君と天プラの立喰をした。君は其時の主人の身振動作が實に能率的だと感心して、注意して見れた。左手から右手に、其手から鍋に、鍋から皿へ、其處に少しの無駄がない。

次から次へ些の澁滯もなく繰返されて、海老は天プラとなつて、私共の皿に運ばれた。斯うした些細の事柄にも、君は常に興味を以て注意せられた。

回顧すれば舊冬のクラス會で君に遇つたのが最後だつた。あの感じのよい、明るい溫容は最早永久に私共に惠まれない事と思ふと、眞に斷腸の思ひがする。

## 亡友高松政雄君を憶ふ

### 內藤多仲

兄の樣に敬慕して居る高松君を自分等の仲間から喪つた事は肉身を亡くしたと同じ樣の悲しみを感ずる。先年高松君に病院建築の特別講義を早大建築科で御願ひした事がある。君はその研究の粹を集めて一貫した教材を作られ、熱誠を込めてその蘊蓄を學生に傾注された事がある。指を屈する程しかない病院の研究者その先導者として立派な研究の成果をまとめて世に公にする前に亡なられた事は返す返すも殘念である。

## 級友の追憶

### 內藤太郎

噫同窓の畏友高松君逝く。

君は天禀の英資を以て、常々格勤熱誠の人であつた。君は又キリスト教信者であつたが所謂教徒の臭味を脫して自らの信仰に生きた他面趣味の人として繪畫に、音樂に、詩歌に、獨特の優れたる技倆を有し、同窓皆君を敬すること長兄の如くであつた。

君遇々病魔に冒され、突如として逝く。行年五十、正に君の生涯は最も有意義で、又無駄のない一生であつた。

玆に故人を偲び、謹で追悼の意を表す。

## 亡友高松政雄君を憶ふ

### 中村琢治郎

昭和9年3月11日畏友高松政雄君は忽然として逝いた。誠に突然のことであつた。君亡き後の朝な夕な凡ては夢のやうである。葬送の準備に取まぎれてゐた內は兎も角、葬儀から埋葬まで一通り濟ました今日、同君を憶ふ哀愁の情は、更に私の胸を傷めるのである。同君は優れた人であつた。建築家としては練達堪能な建築士であり、立派な藝術家であつた。

交友の間にあつては友情の厚い友であり、家庭にあつては慈愛の深いパパさんであつた。斷じて人の惡評を口にすることをしない、決して人に怒つたり、人を叱つたりしたことがない。心の豐かな人であつたから何時も朗かな顏をしてをられた。暗いものゝ影は微塵も見えなかつた。不氣嫌な高松君を見た人はない。私達同窓のものが今日學生時代の親密さと變りなく依然として美しい友情に結ばれてゐるのも同君の如き心の溫かい人が居られたからであらう。同君を失なつたことは同窓全部の深い悲しみであつた。建築界及一般から惜まれたゞけ夫れだけ私達には實に惜しいことをしたと思ふ。私は仕事の關係から最近は特に接近することが多かつた。發病される前夜即ち3月2日の晩に私は同君と藤村君と三人で丸ビルの山田で撞球を樂しんだのであつた。同君は食事がすゝまぬといつて接戰數合の後一足先歸へられたのであつた。發病は其の翌朝からで、5日の晩に穿孔性胃潰瘍と診斷せられて深更切開手術を受けたのであつたが、苦惱去らず、死の苦惱と闘ひつゞけたのであつた。病苦のうちにも業務の事をわすれず、或る擔當工事の平面圖を右手が痲痺して動かないので不自由な左手でメモ用紙へ鉛筆書で書き與へられたことであつた。澤山の大きな仕事を抱へて重大な責任を持つ身であられたから心殘りもあつたであらう。其の切情は充分推察出來る。11日の午前1時過ぎ病革まるとの使者があつて病院へ馳せ付けたのであつたが、發病後初めて見る變り果てた姿、やつれた顏を見て傷ましさに言葉もなかつた。私は寢臺を圍つて泣きくずれてをられる家族の方々の間から寢臺に取りすがつて、高松君の顏をのぞきこんだ。「中村さんですよ、中村さんが來て下さいましたよ」と耳に口を寄せて知らせて下すつた。その瞬間、苦惱を忘れたやうに、大きな眼を見開いて私の顏を探し求めて、さも嬉しさうに微笑された。そして死に直面してゐる今は神の愛に抱かれて心も安らかである。何も思ひ殘すことは無い。自分は常に幸だつた。自分のことは心にかけるな、子供達は各自己の將來を自重自愛して行けば良い。といふ意味のことを途切途切れに諭し、私に對しては「僕はクリスチヤンだ、君

もクリスチヤン」だといはれた。その意味は自分は今神の深き愛に護られて居る。君もクリスチヤンとして强く正しく生きて行けよ」といふことである。私は高松君の口を通して神威に觸れたやうな氣がして胸を打たれた。高松君の最後は斯くも立派であつた。死に直面しても妻に對して生前の足らざりしを謝し、子女に對しては將來を諭し、友に對しては神の榮を說く、實に立派な最後であつた。葬儀に當つては君の生前の名聲と信望とを以て多くの人々の哀惜の厚情を受けた。友人として私共同窓斯美會の人々は心から動かされて朝夕心を盡して葬儀の事務にかひかひしく働いた。心ゆくばかりに働いた。葬儀は誠に盛大嚴肅に行はれた。私達斯美會員は靈柩を負ふて其の重さに足もよろめいた。永別の莊嚴さにうたれて夢中であつた。

畏友高松政雄君は斯くして吾々斯美會から忽然として去つた。今日も尙夢のやうである。君が建築界に殘した足跡は偉大である。其の偉業は永遠に光を放つことであらう。最後に私達は君の遺族の方々の將來に神の榮光豐かにあらんことを願ふものである。

## 同級生として

### 古橋柳太郎

故人の追憶は在りし日の君の功績を羅列する事よりも君の若かりし日より病床に臨終の最後の有樣を有の儘に憶ひ起すこそ彼に眞の敬意を表する事とならう。

我等の學生生活に於て最親し味を感じ眞に刎頸の交を爲し得る時代は最終學程であらう。我等には大學時代であつた。故人の大學時代は彼が闊滿な性格の持主であつた丈けに他の友人より飛び離れて特異な點があつた樣にも思はれなかつた。彼は鋭敏な觀察力をもつて居つた。然しこれは彼に對して親し味を增したファクターであつた。鋭敏性は兎角神經質性を伴ふものであるが君も亦良い意味の神經質であつた。學友間の出來事、事の良否を問はずかなり神經的に心配した。自分自身の出來事には强い責任感をもつて病氣にならむばかりに心配した事は度々であつた。君は友人間に相互の感情の疎通をはかる事に努力した。これは君が全生涯を通じて爲された事で彼に對して感謝せねばならぬ事柄である。君は學生時代から學究的の人と言ふよりは寧ろ研究的の人であつたと思ふ。我等の專門に關する研究はかなり綴密になされた。行屆いた批評をした。攻擊批難の態度は更に無かつた。大學時代に君は好むでジョンラスキンの藝術批評に關する書を讀むだ。余自身も時々ラスキンの批評の批判を君と交した事がある。余はラスキンの藝術論以外のソシアルリフォーマーとしての著書も讀むで、ラスキンの思想的方面信仰的側面を君に紹介した。其の時君はジョンラスキンが藝術的批評の天分の外に思想信仰の方面にも蓄深きに憧憬して君が信仰の一端を君の專門の鎖に連結したのもこの時代であつたと想像する。

社會人としての君は能く學生時代の長所と信念とを延長した。君は家庭の家長として兩親の扶養、弟妹の世話、緣に繫がる者の世話等に自ら安んする時もなく、盡された犧牲の精神と行爲は實に我等の感嘆に價するものがあつた。更に我等友人に對する君の諸般の努力と溫情に就ては今尙ほ感激を覺えるのである。君が社會への第一歩は曾禰中條建築事務所へ入所せられ、當時東京海上火災保險會社本社の設計に着手せられたが、不幸にして病を得休養の已むなきに至つた。時恰も余は支那より歸朝し曾禰中條兩先生の御厚意に迎へられ君が仕事の後を嗣いで兩先生の御指揮の元に働いた。後余は中條先生の推薦によつて渡米するに當り君は病氣全快し再び同事務所に海上保險の仕事に掌はる事となつた。これが君と余と社會的關係に於てより接近したのである。尙ほ面白い事は、當時君が病全快し再び活動の門出に當つて其の祝福を祈るべく新家庭の構成に就て余は親しく君の相談を受け、仲保の御使に走せ參じた事である。これが君と余と個人的關係に於てより親し味をもつたのである。

君は日常生活に於て或る種の信念をもつて居られた。それは君の隱れたあらはに世に出ない力强い何物かであつた樣に察せられる。君には世の中の人が知らずとも力强いあるものを陰にまはつて供へるてふ事が尊い事業であるとの信念に大悟徹底されて居つたかの樣に思はれる。君は自分の事よりも人の事を先にした。君が其の友より信賴を受けられ、親はれ、愛せられたのは全くこの尊い心情からである。君は西洋音樂の感傷的なメロデーを好むだ。君のメロデーの作曲は模倣的といふよりも感傷的な獨自のリズムである。然も彼の性格の一端を窺ふに足る特異の曲である。

君は旣に永久の休憩に入つた。彼の死は彼の遺されたあらゆるものを通して今尙ほ我等の間に更生しつゝある。彼が生前の行動、彼の友情は今尙ほ生きて我等の間に働きかけて居る樣に思はれる。「一粒の麥地に落ちて死なずば唯一つにて在らむ。もし死なば多くの果を結ぶべし」と。實に高松君の死は永久に死なざる多くの記念を遺された。

## 高松を憶ふ

### 安井武雄

よき友達、自分の御手本になる樣なよき友達を親しい友として持つて居る程の幸福は餘りないと思ふ。

私は斯樣な點に於て自分の最も親しい友達の一人として高松君を數へ得る事を大變有難いとも思ひ又何んとなく誇らしく感ずるのです、高松君の死は私にとつては堪へ難く寂しい。

私は彼れと大學に在る三年間を同級生として同じ下宿に文字通り同じ釜の飯を喰つた隨分御互に我儘の云合ひをしたものだ。學校を出てから私は滿洲に行く彼れは東京に殘り、遠く離れた爲に餘りに膝を交へて話しをする機會もなかつたが、其後十年計りたつて外遊中計らずも紐育で半年餘りも同じアパート住ひをした、御互に旅程も都合出來たので同じ船で日本に歸つた、大正十年若葉が花にかはる頃であつた、而して今復偶然にも病床に彼の手を握つて最後の別れをさへした凡てが因緣であらう。

隨分永い交りであつた而して親しい間柄であつた、彼れに對して彼れや斯れやと盡きない思出が湧く、然かし忘れ難いのは人間としての彼卽ち人間高松である。

彼れは專門の道に關して蘊蓄も深かつた造詣も廣かつた、而して其道に立つべき素質も立派に持つて居り常に私等の指導者であつた、斯界に貢獻する所殘した所も多かつたが私は人としての彼れが殘したものに心を打たれる。

彼れ程人間味の豐な人は私の周圍には多くなかつた、彼れは溫い心の持主であつた。彼れを知つたものは一人として彼れを惡んだものはなかつたらう、彼れは又心の正しい人であつた、夫れが爲に隨分と公憤を洩らしたが、決して私怨は持たなかつた。

だから彼れの生み出したものには威壓を感ずる代りにむしろ抱擁を覺えるのである。而して彼れの行動に洒脫と云ふものを求め難いが眞劍味が充實して居た。

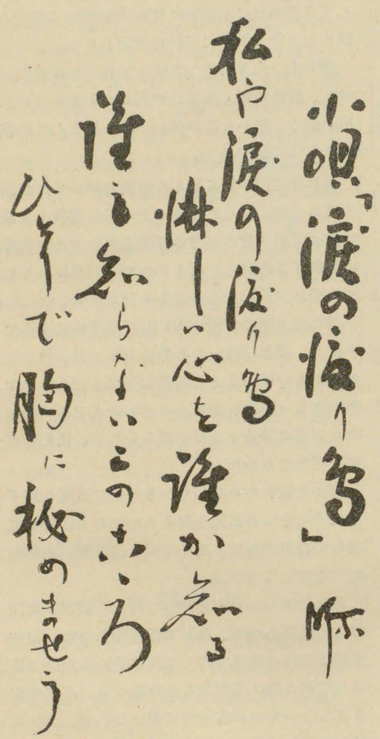
彼れは美しい信仰を持つて居た。彼れは周圍の凡てに篤かつた、而して謙讓であつた、彼の生涯は彼れの價値に對して現世的には充分に償はれて居た樣に見受けられなかつた、必ずや飽き足らないものが有つたに違ひないが、彼れは是れに對して凡ての境遇を神の惠として甘受して感謝して居る事を常に私に話して居た。彼れの生涯は眞に深い意義ある生活であつた、神への感謝に生活を捧げたのだ、彼の篤い信仰の賜物であるであらうが敬慕に堪へない。

彼れは死の直前に自分の爲すべき事を澤山殘したと洩らしたそうだ、彼れの死が凡て之等を中絕させた事は惜しい、然かし私は人としての高松を失つた事が何よりも殘惜しい。

昭和九年四月

## 高松君の小唄

和田信夫



高松君の小唄

この小唄は昭和8年10月20日に目黒の雅叙園で斯美會の集りがあつた際高松君が斯美會誌に遣された最後のものである。斯美會誌といふのは同窓斯美會同人だけが窺知し得る卷物で、集りの都度、それも近來は年に一二回しか催されないが、興の湧くまゝに極めて無遠慮に感想を表はした祕寶で、最後の一人が彼の世へ行く時に持參する事になつて居るもので、追憶の爲め玆に其の一端を御紹介する次第である。

## 25年前の思出

黒田鵬心

高松君と私とは科は違ふが共に明治43年の東大出であつて、始めて同君が來訪されたのも其年の夏の頃であつた。君は卒業後直ちに曾禰中條建築事務所に勤務され、私は暫くぶらぶらしてゐたのであるが、建築批評の事から交が始まり、忽にして親交を得、同君の私事に迄立入るやうになつた。それから翌44年2月には私が讀賣新聞に入ると、宛も議院建築問題が勃興したので、一層同君との交渉が頻繁となつた。然るに其後同君は病を得て、一時建築事務所も休み、茅ケ崎の南湖院に入院され、輕快となつてからは同地に靜養する身となつた。その茅ケ崎へも見舞がてら行つた事もあり、又同君も上京して來訪された事もあつたが、當時は隨分よく手紙を書いたもので、しかも同君の手紙は普通が6錢で、稀には9錢の事もあつた。當時暇があつたとは云へ、細字で6錢の手紙を頻々とよこされたのは、達筆の爲もあるが、思想の豐富と精力の旺盛であつた事を證するものである。そして昭和3年5月頃からは丸康も大分恢復して益々長い手紙を貰つた。全判の西洋紙に細字で12頁に亘るものなどもある。今讀んでも全く驚くべきものである。そんなのが10通ばかりもあるが餘り長文なので發表は遠慮した。しかし昨年も古い手紙を整理した中でも、高松君のだけは燒棄するに忍びず保存し、讀直して色々教へられる所があつた。

同君が上京されて再び曾禰中條事務所に勤務されるやうになつてからは、却つて手紙も往復せず、相互に忙しのでつひ疎遠になる事が多かつた。しかし明治44年から大正4年頃までの4年間に亘る親交は私の一生忘れ得ざる所であつて、御互に若かりし時代の思出の一つである。



昭和10年9月1日印刷
昭和10年9月5日發行

**高松政雄君の制作と著作**

（非賣品）

編輯者　中村琢治郎
東京市目黒區上目黒7丁目1005番地

發行者　内藤多仲
東京市牛込區若松町76番地

印刷者　松井方利
東京市深川區白河町4丁目1番地

印刷所　東京印刷株式會社
東京市深川區白河町4丁目1番地

發行所
**故高松政雄君記念事業會**
東京市京橋區銀座西3丁目1番地
建築會館7階日本建築士會内

616-108
1200501536432
616
108
複写